

C-37 室町時代の衣服の遺名

(第4報)

福島大教育

栗原澄子

目的 妻は、神代より男・女ともに用い、後には唐衣とあわせて女子専用の服となつたといわれているが、今日遺品として残されているものにはどのような種類のものがあるか、その形態・製作方法はどうかであったか。また、その変遷はどうであるかをしらべる。

方法 室町時代の奉納といわれている熊野速玉大社と阿須賀神社の海賊妻と、熱田神宮の妻類を調査した報告をする。

結果 熊野速玉大社と阿須賀神社の海賊妻は、形態・地質とも他に例をみないものであった。腰紐は二階織物・妻は文綾で手描の海賊文様が描かれている又は妻のようであるが、妻は六巾用い、前と後の短い股上から下は大口のように足が二つにわかれて縫われており、その文綾は今日の遺名類の文綾には例をみないほど織糸がたいそう細くて、糸の間隔は疎であるのに非常に張りがあり、素張加工されてあるものとみられた。熱田神宮の二腰の妻は、この時代には既に織られていなかったと思われる文羅が用いられており、形態も丈が短く、巾は8巾のうえに更に領幅付で、おのおのの襷は浅く、着用すると前で重なるほど巾の広いものであった。他の二腰の緞緞妻と思われるものは、二巾のものに領幅が付けられ、丈は長いものであったが、用いられている文綾は厚手のものであり、これは時代の降つたものと思われた。